東京陵水

賀　正
平成18年 元旦
陵水会東京支部役員一同

目　次

1面　宇治原陵水会支部長年頭挨拶
2面　役員幹事会
2面　規則の全面改訂について
3面　獅山彦根市長に聞く
7面　こんにちは
10面　わがウォーキングライフ
11面　ゴルフ談義
12面　サークル二一座談会
14面　彦根コンフィデンシャル
15面　年会費納入者一覧
16面　広告

年頭挨拶

母校支援・連携・交流プロジェクトの更なる推進を目指す

陵水会東京支部長
宇治原　嘉政（大7）

東京陵水のみなさま明けましておめでとうございます。

日本経済は長いデフレのトンネルを抜け出し、新しい年に入り新たな局面を迎えようとしております。陵水会員諸兄におかれましても新たなる期待感をもって二〇〇六年を迎えられたことと存じます。

陵水会は昨年大学法人化に伴う大学の競争力強化の一環として、学生の実学への関心をより一層高めるため、陵水会協力講義を大学と協議のうえ学習単位付与の講座としてスタートさせました。当東京支部より西坂徹雄氏（大9）が講師陣の一員としてご協力いただきました。講座の題名は〝リーダーシップ論〟で常時百名余の学生が熱心に受講したと聞いております。また、昨春には新入生対象のジュニア陵水懇話会も開かれ〝有意義なカレッジライフを過ごすために〟をテーマにOBによる講演が行われ、これには当支部の大原孝明氏（大38）松澤進氏（大38）の両氏が講師としてご多忙のなかご参加いただきました。

今年もこのような陵水会員による自らの経験・知識・ノウハウの提供を通じての学生の勉学への啓発をさらに推し進めてまいりたいと思います。幸い東京支部は二千名弱の会員を擁し、それぞれが多方面でご活躍のため豊富な講師陣容として申し分ない状況にあります。ご多忙のなか恐縮ではありますが、彦根母校の学生のためにひと時を割いてご協力のほどお願い申し上げる次第であります。

さて、先般彦根本部よりお送りいたしました「陵水会年報」に同封されておりました『陵水会本部年会費の納入方法につきご協力お願い』に関してであります。支部費を集めない支部もありますので〝本部会費〟とのみ記されておりますが、東京支部の場合は〝支部会費〟も同時に口座振替による納入を行うこととさせていただきます。支部の事務負担軽減のためご理解のほどお願い申し上げます。現在東京支部の登録会員数（＝本件東京陵水新聞配布者数）は一八六五名、残念ながら登録者数に対する会員納入者数の比率は僅か二十％の低さにあります。ウッカリ忘れを防ぐことを含めてこの際納入比率を飛躍的に高めたくみなさまのご協力のほどお願い申し上げます。上述の『陵水会本部年会費の納入方法につきご協力お願い』の用紙にご記入いただき同封の本部宛封筒でお送りのほどよろしくお願い申し上げます。

今年は大学支援・連携・交流プロジェクトをさらに推し進めていく所存であります。

前述の陵水協力講義（単位付与）、ジュニア陵水懇話会に加えて陵水会員のゼミナール特別講師への派遣、ゼミ学生の企業研究訪問は是非実現、軌道に乗せたいと考えております。陵水会員のゼミナールへの講師としての招聘はゼミ教官により散発的に行われておりますが、費用は教官の自弁であり制度としてワークしておりません。そこで陵水会が引き受け陵水会会員講師の推薦、派遣費用の負担を行いたいと考えます。ゼミナールにおける陵水会員講師と学生との対話を通じて学生に実業界の息吹を感じさせ、勉強への良いインパクトを与えることができると確信するからであります。また、ゼミ学生の企業研究訪問も実業界の現場を肌で感じる意味でも有意義であり、会員諸兄による会社訪問機会のご提供につき特段のご協力をお願いする次第であります。

このようなプロジェクトのスムースな推進のために本部・支部予算の拡大は必須であり、そのためにも会費の納入比率の引き上げは喫緊の課題であります。今回の『会費振替口座支払い』につきまして会員みなさんの特段のご配慮を重ねてお願い申し上げます。

さて、親睦団体としての陵水会の課題はヨコの繋がりからタテの繋がりへの展開であります。同期会の集まり等を通じてヨコの繋がりはそれなりに活発のようでありますが、タテの繋がりはゼミ・クラブ活動のOB会を通じる以外活発ではありません。そこで何とかタテの繋がりの核となるようなものをと考えますが妙案が見つかりません。支部総会と年二回開かれる年次幹事の会が数少ない機会であります。

昨年、年代別の年次幹事の会

を開こうと提案いたしましたが未着手の状況にあります。この辺のアイデアにつきご提案があれば是非お聞かせいただきたいと思います。

彦根キャンパスに学んだ先輩・後輩が集まり胸襟を開いて自らの経験を語り、知識を交換することは大変価値あることです。益々変化の激しい、厳しい経済社会環境のなかにあって先輩・後輩の交歓の場は言ってみれば砂漠の中の〝オアシス〟であり明日への活力の源泉ともなるものです。このようなタテの繋がりの場の機会を提供していくことが、ひいては東京陵水のさらなる活発化につらなるものと考えます。このような呼びかけが行われました時には是非ご参加のほどお願い申し上げます。

今年の支部総会は五月十六日（火）キャピトル東急ホテルにて開催の予定であります。

第18回卒の方々が開催幹事として準備していただいております。なにとぞ万障お繰り合わせのうえご出席のほどお願い申し上げます。

東京陵水諸兄のみなさまがたの新しい年の一層のご活躍とご家族のご多幸をお祈り申し上げます。

平成十七年度第二回役員幹事会の開催

平成十七年十一月二十五日（金）午後六時から、文京区後楽一丁目の後楽園会館において、本年度第二回の役員幹事会が、幹事役員二十九名の出席のもとに開催された。検討事項は(1)本部、支部年会費の口座振替について、(2)「東京陵水」次号発行作業の準備状況について、(3)年会費振込み状況報告、(4)平成十八年度総会について、(5)その他。

本部、支部年会費の口座振替について：宇治原嘉政東京支部長（大7）から口座振替制度の実施の方向について説明があった。「今後に当たっては現在の振込み制度と口座振替制度を併用しながら、徐々に後者に移行させてゆきたい。時間をかけて実績の積み上げを図ってゆく考えである。」

会員から「会費の増収を図るには請求をこまめにすることが先決であるが、口座振替払込者など納入に積極的な者に特典を与えるなど工夫したらどうか。八十歳以上の高齢者の払込について何らか配慮ができないか」との意見が出された。

「東京陵水」紙の発行準備：林史欣「東京陵水」編集委員（大8）から、現況を報告。十一月一日に彦根市と母校とが協力協定を結んだことで、彦根市長インタビューを実施したこと、陵水会員インタビュー、同窓生近況、ゴルフ談義、囲碁会報告、母校情報など、例号掲載記事の紙面構成を、十二月下旬上梓に向けて推進中との報告を行なった。

支部年会費の納付状況：現況について田村寿夫副幹事長（大12）から説明があった。「本年十月三十一日現在では、支部会員登録数一八二八のうち、納入者は三六七名で前年より六五名の増加。現在未納者のうち、過去に支払った実績のある人が七二五名、平成一二年以降の支払実績のある会員が二二三名数えられる。また今年度支払復活した会員も四十名近くになった。今後とも納入には格段の協力を願いたい。」（今年度支部会費納入者追加分を十五ページに掲載）。

十八年度総会について：当番幹事を代表して中村嘉秀氏（大18）から現在までに進められている内容の説明があった。開催期日は平成十八年五月十六日（火）、会場はキャピトル東急ホテル（千代田区永田町二―十―三）。会議次第の説明の後、特別講演会の講師として、母校の故小倉栄一郎名誉教授のご子息、筑波大学教授（社会工学系・大学院経営システム科学専攻）小倉昇氏にお願いをしたとの報告があり、講演の演題については小倉教授が検討されているとのことで、依頼の経緯事情、講師の経歴などの紹介があった。十二月上旬には当番幹事十八回生の会合が開かれ、更に開催要領を具体的に検討し、開催までの計画を詰めてゆく。

その他：会費の納入を三千円定額ということでなく、十年分とか五年分とか、また会費プラスアルファなどの受付を考えてゆきたい。

現役学生との交流を深め、活動のモチベーションを与えるため、母校のサークル活動などで成果のあったところに陵水会から表彰する。

陵水会の活動、母校支援策などの記事を「滋賀大陵水新聞」に掲載する。

支部規則の改正理由の徹底を図る努力をする。等々が報告事項として挙がった。

以上を審議検討のあと、懇親会に入り午後八時半過ぎに終了した。

陵水会東京支部規則の全面改訂について

東京支部監事　高木早苗（本24）

時の流れとともに憲法の改正について国会でも検討されるようになり、商法第二篇も独立して会社法と制定された。当支部規則においても、実情に応じた改訂をする必要があるため、支部長より次の通り支部規則委員会構成者として委嘱があった。

宇治原支部長、守谷幹事長、田村事務局長、楠田迪彦（本24）、高木早苗（本24）、中川寿一（大10）、柴原良昭（大17）。

平成十六年総会当日、来期の定時総会に諮り、改定実施の方向が提示された。その後、十一月二十五日開催の幹事会において議題とはされず、閉会後支部長より支部規則を改訂する旨、発言があった。

○実質的改定について。

委員会に先立って十七年一月二十四日、宇治原支部長、守谷幹事長、高木委員の三者にて主に次の五項目について検討した。

①幹事会②事務局長③決議方法④会計年度⑤本部評議員。

同年三月十一日、委員会を開催、タタキ台をもとに討議した。

楠田委員より、規則の中にネットワーク強化の文書は適切かと発言があり、支部長より特に強調したい旨回答、了承された。

中川委員より、事務局長の役割任務について経験よりの説明が行なわれた。

柴原委員より、本部評議員を第二章に組み入れることには苦慮した旨報告され、妥当として了承された。

○形式的改訂について。

委員会に先立って行なわれた検討会後に、章別にまとめるよう提案したが、そのままとのことで、委員会に原案を提示した。

柴原委員が全く同じ趣旨で、章別案を提示、審議した結果、章別に分けることとして、更に柴原案の条文の次に括弧書で見出しを付与する旨で了解、定時総会に全面的改定案として上程した次第である。

以上の通り慎重に審議したことをご報告します。

近江歴史塾の開催

平成十七年十月四日～五日にわたり、第七回近江歴史塾が上野の東京国立博物館平成館大講堂において開催された。この滋賀県の歴史、観光についての講演を主とする勉強会も、会を追うごとに盛りあがりをみせてきている。大講堂一杯の受講者をみて、主催者としては県外関係者の関心も一層高まってきたものと歓びを隠さなかった。

今回は、叡山学院名誉教授、渡邊守順氏が「日本史で活躍した近江ゆかりの偉人たち」をテーマに一時間十分、休憩を挿んで、沙沙貴神社宮司、丘　眞杜氏により「近江源氏佐々木氏と沙沙貴神社―全国佐々木姓のルーツを探る」について、それぞれビデオ画像の拡大投影を使いながら行われた。前者では、比叡山の最澄と湖南三山が取り上げられ、比叡山の世界文化遺産として尽きない魅力が、開祖最澄を始として多くの日本史上の人物によって生み出されてきたということ。石部を中心とする湖南市の常楽寺、長寿寺、善水寺の湖南三山の新しい観光的魅力について、高齢の講師が語った。後者は、長い沙沙貴神社の歴史の中で培われてきた伝統と伝えられた建造物、遺物の説明、宮司の丘姓から始まる佐々木姓の沿革などを聴講者に新知識として伝えられた。終了後滋賀県内ホテルの宿泊券が当たる抽選会が開かれた。

昨年十一月十一日（金）、編集部は獅山向洋（ししやまこうよう）彦根市長を訪ね、彦根市と母校との関わり合いなどにつき、以下のお話をいただきました。

――彦根市と滋賀大学とは長いお付き合いの歴史を持ち、創立当初から多大のご支援を頂いております。今回、国立大学法人化に伴い地元のご協力がいただけることが、大学の今後の発展につながることを思い、お話を頂戴したくお伺いいたしました。

市長　私は彦根に生まれて、大学時代は少しの間、京都にいっておりましたが、あとはずっと彦根におります。しかも昔でいう四十九町に生まれ育ちました。ですから、ある意味では滋賀大学さんとは長いお付き合いです。ちょうど私の家のすぐ前に、風呂屋があるんです。寮生さんがよく来ておられまして、後年、宇野宗佑さんにお会いした時も「おい、獅山君、君の家の前の風呂屋にはよくいってたよ」といわれてました。昔、滋賀大学生がバンカラというか、男ばっかりだった時代で、毎晩夜遅く放歌高吟して帰ってこられたものでした。

――ご迷惑をおかけしてたんですね。

市長　そんなことございません。ところが、近年は、女性の学生さんが増えてきまして、なんか雰囲気が全く変って来ましたですね。私は京大を出たんですが、司法試験の勉強をしておりまして、五～六年、京都におりました。検察官をやり彦根を出てたんですが、あとは彦根ばかりなんですよ。

しかも私のところは、父親が碁をやっておりまして、一番よく来ておられたのが森順次先生、その次が大谷孝太郎先生でした。で、それにつられて他の先生方もちょくちょく来てられましたね。それと芳谷先生と山本先生の息子さんと同級生なんです。森先生の娘さんとも同級生でした。なんといっても近所でしたからね。また小さい頃は、よく、うさぎを運動場へ連れて行ってクローバーを食べさせていました。

母校との相互協力協定締結
獅山彦根市長に聞く

相互協力協定を締結

――先日、彦根市と滋賀大経済学部が地域の活性化や文化の振興などで相互協力される協定を結ばれたというニュースに接しましたが。

市長　実は、これは灯台もと暗しという感じがありまして、残念ながらこの協定を結んだのは、県内では四番目なんですよ。大津市は教育学部がございますので早くにやっておられますが、現在は米原市になりました坂田郡山東町とか、安土町も協定を結んでられてます。私どもは地元ですから長いお付き合いがあり、なんだか当り前のような関係になってまして、やはりこの際、協定書を作りましょうかということでしてね。実質、滋賀大学さんとの関わり合いというのは非常に多くございまして、彦根市のあらゆる審議会とか委員会に、滋賀大学の先生にみな入っていただいてるんです。

例えば、彦根市ではいま総合

発展計画の見直しをやっておりますが、その審議会の委員に森将豪教授にはいっていただいております。滋賀大学で一番熱心に委員をやっていただいてるのが、山崎一眞先生です。当然、学長さんにも参画していただいてますし、若い先生にも加わっていただきアドバイスをいただいております。現在、県立大学からもいろんな方に入っていただいておりますが、大学のある街のありがたいことは、なにか委員会などをもつときは、すぐ先生をお呼びできることですね。よそさんはなかなか来ていただけないということですね。それで協定を結ばれるところが多いんですよ。それと協定を結んでおくと来て下さいと言いやすいですしね。ところが彦根市は協定を結ばなくってもいつでも来ていただけるということで遅れてしまったわけですね。

――大学は法人化され、勝手に稼げということで彦根市に助けていただくようなことになるんですが。

市長　恥ずかしいことで彦根市もお金がなくって弱っていますが、その意味ではお互い智恵を出し合ってという感じなんです、現実は。

滋賀大学がいまおっしゃってますことは、通学のバスをもっと増発してほしいということです。彦根駅から滋賀大学までのですね。県立大学と比較しますと、県立大学は八坂町にありますから、遠いという事情もあるんですが、たまたまその近くに彦根市立病院が移転したんですね。その市立病院を通って県立大学へ行くバスの便が多いものですから、滋賀大学のほうはバスの便がほとんどないといっても過言ではないんです。それで成瀬学長さんから盛んに何とかバスをといわれているんです。因みに滋賀大学の武永淳先生にも公共交通機関の検討委員会に入っていただいております。都市建設部の交通対策室の委員会です。ここでできるだけ言ってくださいといってるんです。いま滋賀大学で一番言ってこられてるのはこの問題なんですね。いまは学校間の競争が厳しくなって、バスで何分と書かないとやはり弱いんですね。どうしても公共の交通機関がないと、自家用車で来るということになりますね。そうしますと駐車場とかが必要になってきまして、そういうことでご苦労されているようですね。極めて切実という か身近な問題なのです。

一般的なバスのルートの中に滋賀大学を入れるということになるんですが、それがいま、バスの利用者が激減してまして、バスそのものがやっていけなくなっているのですね。それで彦根市はじめ、いろんな町もバスの運行を維持するために、近江バスにいろいろ補助金を出しております。それがバカにならない金なんです。むしろ近江バスにバスの運行を委託するような形で、スクールバスをやったほうが安上がりじゃないかと。そうすると回り道せずまっすぐ駅から来て、時間帯も指定できますから。もう、そういうこと考えませんかといっているんです。例えば大きい会社なんかは近江バスに委託して、その時間だけ運行しているところもあるんですから。

現在、滋賀大学さんに関わりがあるといったら審議会や委員会をお願いしていることと、いまのバスの問題、それともう一つは彦根城のことです。彦根城は平成四年に世界遺産の暫定リストに登載されているんですよ。ところが、たいした働きかけをやってないもので、いま山崎一眞先生に「国宝・彦根城築城四〇〇年祭事業」のメンバーでやってもらっています。山崎先生や県立大学の先生方が私らよりも熱心に世界遺産登録のことでご尽力いただいています。

韓国の水原市（スーウォン）に有名な城郭があります。それは、あるときの王様が京城（ソウル）から遷都しようとしたときに作った立派な城壁と楼門ですね。既に世界遺産に登録されているんですが、スーウォン市の方々と山崎先生らが東アジアの城郭研究をしようということです。過日も京畿大学の錚々たる先生も来られて、彦根城が世界遺産になるについてはどうしたらいいかということについて、コーチしていただきました。

世界遺産の暫定リストに載せていただいたのは非常に速くて平成四年でした。世界遺産の条約を日本が批准したのが平成四年でしてね、その年度内にはリストには載ったんです。ところが姫路城に先越されてしまいまして、それ以来十年以上経ってしまいました。

――以前にお城の濠をきれいにされましたですね。

市長　私は平成元年から五年まで市長やってたことあるんですが、その時に彦根城の濠を準用河川にしてもらったんですよ。そうなると河川ですから浚渫もしなければならず、濠全体をきれいにしていただいたんですが、濠全部の泥をあげてきれいにしていただくのには十年以上かかりました。

――お城に入るのには有料ですね。

市長　そうです。ちょうど二年前ですか、無料の制度をやめてしまってるんです。彦根市民まで五百円払わないと入れなくしてしまったんですが、来年にはやめようとしております。市民の税金で維持しているのに、そんなバカな話はないだろうと。

街造りに先生・学生も参加

――学生は市にどんな貢献をしていますか。

市長　大学はこの頃、随分いろんなことやってられますよ。先

彦根市役所

ほどお話しました山崎先生が地域連携センター長として、商店街とかと随分タイアップされています。彦根の昔でいう、久佐の辻からまっすぐ袋町のほうへ行くところは、現在、花菖蒲通り商店街という名前になっているんですが、山崎先生が学生さんと一緒にいろいろ熱心に街造りをやっていただいたんです。先日も「街の駅」というのを作られたんですよ。街の中でみんなが集まれるようなプラットホームみたいなものを作ろうということで、昔の寺子屋だったお店に街の駅を作られたんです。

最近は、先に申し上げましたように、夜に放歌高吟というのはなくなってしまいましてね。随分静かになりました。それともう一つは、現在、滋賀大学には学生さんが二千人おられるんですが、先生や職員さんも入れると二千二百人くらいになりますか。そのうち八百人の人が通学なんですね。つまり彦根駅を通じて通ってられるわけです。そういう意味で、下宿してられる方が減ったということですね。それと女性の方が増え、殆んど通学ですからね。

――最近は地元の人が少なくなったように聞いているんですが。

市長　そうですね。特に中京というか岐阜県とかからが多いですね。例えば岐阜県とかには経済学部というのがないんですね。ちょっと空白になってまして、京都まで行けば多少ありますが、それでも四学年で二千人もの規模のある経済学部は珍しいんですね。そういう意味で吸引力があるというか、法学部とかはいっぱいあるんですがね。経済学部は非常に少ないんです。

――学生寮については。

市長　昔、東洋繊維という会社がございましたが、ご存知でしょうか。回転橋の近くなんですが、トスコというんです。ここは潰れたわけではないんですが整理されまして、そこに広大な土地ができました。結論としていえば滋賀県が取得して滋賀大学さんにお渡ししたということです。犬上川沿いにあった滋賀大学の旧グラウンドと交換したわけです。その時に彦根市もちょっと関わりがあって、滋賀大学の教官やら職員の宿舎になっていたヴォーリスさんの建物との交換の話が出てたのです。が、最終的にこれは駄目になりまして、滋賀県と大学とでグラウンドを交換したという経過にはなっております。

ところが、城町二丁目に国際交流会館を滋賀大学が作るということになりました。滋賀大学の二つの土地のその真ん中に、たまたま彦根市の土地があったのです。それで結局、滋賀大学が持っておられたヴォーリスさんの土地と彦根市の土地とを交換して一つの土地にしまして、そこに留学生の寮をお建てになったという経過があります。ですから積極的に援助したとかということではなくて、ただ単にお互いに土地の交換をし合いながら、こういうような施設ができたということです。何といいましても行政や大学やら国はその当時はまだ公でしたんで、簡単に売り買いとかは非常に難しい状況にありましたから、みな交換のような形でやってるわけなのです。

合併・統合は

――県立大学との合併の話なんかは。

市長　全然ありませんね。彦根市には現在、滋賀大学経済学部と県立大学、それと全学合わせても四百人くらいの小さい規模のカトリック系の聖泉大学との三つの大学がありまして、お互いに単位を融通しあえるようにしようかとかの話はあるようなのですが。聖泉大学、県立大には経済学部はないものですから、お互い交流し合おうという機運は出てきているんですね。

今回の市長になりましたのはこの五月ですから、市から側面的に援助することもまだしていませんが、将来そういう話も出てくる可能性はあると思います。すでに京都との関係ではもっと大きい話が出てたのですが、結局駄目になりましたね。

――彦根高商ができたころは彦根に相当ご支援いただいたようですが。

市長　そうですね。あのころは彦根も相当、力があったんだなあと思いますよ。

――彦根市の民力度は大津に次いで大きいのでしょうか。

市長　いやいや、民力という形でいいますと、草津と栗東ですね。大津なんて駄目です。大津は何もないところなんです。やっぱり南高北低というんですか、南のほうが強いですね。経済力では南高北低かもしれないですが、観光とか文化財とかあるいは学校関係とかでは決してそうではないと常々言ってるのです。ところが最近、大学関係でも龍谷大学とか立命館大学が滋賀県の南のほうに出てきておりますので、学園とか学園都市ではだんだん南の方が強くなってきましたね。

――滋賀大学教育学部が学生を近在からとっているということを聞きますが。

市長　これからは、そういうことが自主的にやれるようになっていることは事実ですね。例えば県立大学が県立という以上は、県民の税金で作ってるわけですから、ある程度、滋賀県人を優先させようという考えを持っても別におかしくはないわけですが、いままで国立大学という意味では、なかなかそういうことはできなかったかもしれませんね。いまは大学としての法人化になり、簡単にいうと経営の自由というのもありますから、そういうことで教育学部も考えたんじゃないでしょうかね。

いまでも滋賀大学の先生方はなんといっても誇り高き大学だからという感じですね。（笑）これからは少子化の時代ですので、逆にいうと推薦枠といいますか、それをしっかりと決めてやられていく可能性はあると思います。そうしないと、もう取り合いになってしまいますのでね。特に女性の方は推薦枠というか、真面目に勉強していれば

その推薦枠に入れてもらえるというところに魅力を感じられるようなんでね。

――法人化になって大学も稼がなければならなくなってきていますが、地方にメリットを与える大学でないとと思いますが。

市長　彦根の市役所だけで例をとりますと、昔は高校卒だけで職員になるということが多かったのですが、最近は大卒が当然のようになってきまして、そういう意味で滋賀大学からもたくさん入ってきています。特に県庁くらいになりますと随分たくさん入っています。もうひとつは、いわゆる団塊の世代の方々が次々定年退職されると、その世代の人がどこへ戻ってくるかということに関心がございまして、彦根の市役所でも部長級が何十人もあっという間に辞めてしまいます世代状況ですからね。ですから、いま地方で取り合いになっているのは、団塊の世代をどうして地域に引っ張ってくるかということもあるんです。ですからそういうことからいうと、私は六十五歳なんですが、私の同級生で滋賀大学の経済学部を出た人が、もう定年退職して彦根に帰ってきているんですよ。ですからそういう意味でも必ずしも出たきりではなくて、鮎か鱒みたいに帰ってくる人もあります。ただそういう方は外で苦労されてきていますので、帰ってこられると、うるそうてかなわんですね（笑）。

今後の大学ということになると、折角大学があるのに全然利用してないというのはこちらも悪いし、大学も悪いですから持ちつ持たれつです。先日も滋賀大学の学長さんが来られて協定を結んだときに、「インターネットで彦根のお店を見ているとホームページもへたくそやし、アップツーデイトにしてないし、こういうのを彦根の商店の人たちに教えてもらえませんか」と言ったんです。そうしたら学長さんは「そういうことは私らより学生のほうがよく知ってますので、いっぺん学生に言っときましょう」ということでした。そんな小さいことからでもやってね。学生さんにもアルバイト代としてちょっとお金でもお支払いして、商店主も勉強して毎日毎日変えていけるような、こまめなところがないとホームページも面白くないですからね。見てみたら半年くらいの前のものでは駄目ですからね。

――この協定書では地域の活性化とか文化の振興とかが謳われていますが、具体的には。

市長　先ほど話しましたように、山崎先生は熱心に商店街の相談なんかに乗っていただいていますので、そういういう意味で私たちの行政だけでは視野が狭いものですから、非常に助かってるんです。あと地域の活性化では、ただ単なる審議会の委員とか委員会の委員だけじゃなくて、やはりここで積極的に発

言していただいてるということが、非常に地域の活性化に役立っております。大抵、滋賀大学の先生に座長とか委員長になっていただいていますので、ご発言に非常に重みがあります。

――産業の振興といいますと仏壇の産業とかがありますが。

市長　地場産業としてやってられますね。最近、東京のほうで全国的フェアーというか見本市までやってられますので、それなりに頑張っておられます。ただ産業の振興とかを具体的にとかいわれますと、なかなか難しいですね。経営学とかの問題に関わってきますから、一種の講座的なことはやっていただいているわけです。

文化の振興とかについてはいろいろありましてね。特に高商の時代から、古い建物といったら悪いですが、講堂とか図書館とかいろいろありまして、少しずつ開放といいますか、その方向で進めていただいております。大学を観光資源にするわけにはいかんのですが、観光の拠点になります。特に城に近いものですから、城をご覧になった方が流れていくということが出てきてます。

それと滋賀大学には古い図書資料が多いですね。最近、新聞記事にも出るようになってきています。この間も日本経済新聞に修学旅行のことが出てました。昔の大東亜共栄圏ですか、朝鮮半島から満州、中国を一ヵ月以上かけて行ってられてたことが載ってました。そんな貴重な資料が滋賀大学には残ってますね。特に満州の建国大学とかソウルとかから先生が帰ってこられて、そういうところの資料があるんですね。最近も私の同級生の山本有造君（元京大人文科学研究所長）が石田先生から書籍をずっと引き継いでいまして、石田先生の蔵書を滋賀大学に寄付したようです。そういう貴重なものが残ってますのでね。残念ながら彦根市は井伊家の研究しかやってませんので。（笑）

――教育学部とのキャンパス統合の問題はどう見られますか。

市長　もう教育学部との合併はありえないでしょうなあ。前からそれが問題になってるんですけれどもねえ。大津市と彦根市との話し合いもありませんし、キャンパスがこう離れてますと、どっかにまとめないとという考えが先ずありますからね。私なんか、逆に言いますと、単科大学と、言い方は悪いですが、経済学部だけで二千人もいるということは大変な大学なんですね。卑近な例で、いま県立大学が二千人くらいなんです。県立大学は学部としては三つ四つあるんですが、滋賀大学経済学部はとんでもない大きな大学なんですね。聖泉大学は四百人そこそこなんです。ですからそういう意味でひとつの大学としても決しておかしくないんですね。

彦根城築城四〇〇年祭

――滋賀大学には財政的な支援は。

市長　ただ単に土地を交換しただけなのです。それでも形の上では何かしたようなことになっているんですが、そういう意味では滋賀大学と彦根市とは歴史が長すぎて何もやってないということが正直なところです。最初は彦根は大変なことをやってたんですがね。

　県立大学は新しい大学ですから、彦根市としてもよそへ持っていかれたら困るということで、一所懸命、誘致の運動をしたものですから、誘致の運動をする中で条件はついてきますね。土地代だけくらい持てとか。そのなかにバスの便も入ってたんですよ。そういう意味でも条件を飲まざるを得なかったわけですから、言い訳ですけれど、滋賀大学さんは大昔に来てるわけですから条件がないわけですね。そういう意味で随分損してられることは事実なんです。（笑）

　最後にですが、平成十九年、つまり再来年なのですけれど、彦根城天守閣ができて四百年になるんです。天守閣ができたのが年代的に何月何日と確定できないんですが、一六〇七年にできたといわれております。それに四百年足しますと二〇〇七年になりますので、ちょうど再来年がそういうことになります。築城四〇〇年祭というのをやろうと、いま彦根市は計画を進めてるわけです。場合によりましたらそういうことで皆さんにいろいろとご連絡するかもしれませんので、同窓会くらいはこっちでやっていただきたいと思っております。

　来年のＮＨＫの大河ドラマは彦根も働きかけをしておりますが、長浜とか近江町とかが中心になるようですね。彦根市も井伊直政を大河ドラマでやってくれと頼んでるんですがね。彦根は「花の生涯」で一気に有名になりました。いま日経の夕刊の「奸婦にあらず」が連載されてますが、夕刊まで取ってる方は案外少ないんですね。ついつい朝刊にある例の渡部淳一さんの小説かといわれ、「違う違う」といってるんですが。（笑）今年五月ごろから始まりましてね。一年ほど書いていただくようですが、作者の諸田玲子さんも取材にこの部屋に来られました。

編集部　お忙しいところ、貴重なお話ありがとうございました。

こんにちは

㈱Ｆ＆Ｋコンサルティング会長

福島　吉治氏（大４回）

　福島吉治氏は、証券業界での永年にわたる活躍を通じて、経済界に幅広い人脈を形成され、その立場から、陵水会活動にも多大な貢献をいただいている。証券業界での諸要職をご退任後は㈱ＣＳＫ会長として、情報産業の経営に尽力された後、現在は請われて、㈱Ｆ＆Ｋコンサルティング会長として、数多くの会社の経営コンサルティングにあたっておられる。日比谷公園に程近い、高層ビルの二十二階のオフイスをお訪ねして、興味尽きないお話を伺った。

〒一〇〇―〇〇一一
東京都千代田区内幸町二―二―二　富国生命ビル二十二階
㈱Ｆ＆Ｋコンサルティング
電話　〇三（五五一一）一三〇一

――本日は大変お忙しいなか、お時間をさいていただき、ありがとうございます。ざっくばらんにお話をお聞きしようと思いますのでよろしくお願いいたします。ご出身は岡山とうかがっていますが……。

福島　そうです。ただ岡山というと「里」をイメージするんですが、私の出身は「山」なんですよ。津山の在です。我が家の裏山に登ると、伯耆の大山が見えるんです。学校は先生が全校で四人しかいないで複式教育でした。それでも、創立は明治早々で歴史のある学校でした。

――津山といえば津山藩ですね。

福島　徳川の親藩で外様の岡山池田藩を背後から監視しとったんです。そのため、今でも岡山と津山はお互いになんとなく仲が悪いんです（笑い）。

――高校はどちらへ。

福島　津山高校です。旧制では岡山一中の次に開校した学校です。高校に通うのに、家から駅まで八キロの山を下るんです。駅からは煙の出る汽車に乗って三十分、降りてから学校まで歩いて二十五分くらいかかりました。学校では柔道部にいたので、練習が終って帰るのは終列車です。真っ暗になって家に帰ると、腹が減っているからすぐ夕食をとって寝ちゃう。また翌朝一番列車で学校へ。そんな生活の毎日で、おかげで足腰は丈夫になりましたが、勉強どころではありませんでした。

柔道に打ち込む

――大学での思い出話をお聞かせください。ゼミは大谷ゼミとか。

福島　私はもともと商社希望だったので、為替をやろうと大谷ゼミを選んだわけです。と恰好良くいうとそういうことになるんですが、本音は全然違うんです。大谷先生は運動部に理解があって、私のように柔道部なんかに入っていると必ず「優」をくれるというので入ったわけです（笑）。

――柔道はかなり打ち込まれたのですか。

福島　身体が小さいので強くなりませんでしたけれども、毎日練習だけは休まずやっていました。

――当時の柔道部は強かったで

すか。

福島　強くなかったです。「出ると負け」でした。私立とやると勝ったことなかったです。特に関西は天理大が強かったです。一度天理と当ったとき、先輩がやってきて、「七人のチーム戦で一人一分もてば七分もつ、二分もてば十五分いける。十五分もったらビール飲み放題だ」と言われるんで、何とか頑張ってビール飲もうじゃないかと励まし合ったことがありました。結果は言うまでもありません。

――柔道部時代のなにか思い出がありますか。

福島　当時から京都大学と定期戦をやっていましたが、医学部に丹羽さんという人がおられて、キャプテンでしたが、その丹羽さんに「私立は柔道専門で強いのが当たり前、国立大学だけの大会を全国でやることを提唱しませんか」ともちかけたことがありました。そうしたら「ぜひやろう」ということになったのはいいが、当時の教育大学の反対にあったりしていろいろ苦労した結果、とうとう開催にこぎつけたという経験がありました。私が四回生の時に第一回大会が開かれ、現在に至っています。この間の大会で母校が優勝したとの連絡を受け、本当かいなと思っていると、ついては寄付を……なんて言ってきました（笑）。

――柔道にはかなり入れ込まれたということですね。

福島　ええ、野村證券に入りましても柔道部を作りましてね、五年くらいはやってたんです。取引所内に道場がありまして、そこへ真面目に通っていたんです。お情けで三段まで推薦してくれました。

証券マン、バク進

――野村證券への入社は卒業即ということですか。

福島　そうです。別に三井物産も願書を出していたんですが、野村證券の内定を先にもらったので、入社することになったのです。

――滋賀大から何人か入社したのですか。

福島　十三人受けて三人合格したんです。私と池田、磯村氏です。その後、昭和三十四年に東洋信託銀行が出来て、池田、磯村氏はそちらへ移ってしまったんです。私は本店営業部に入って五年いました。その時の上司が、後に社長、会長になる田淵さん（大田淵さん）で、当時、次長で私の上にいたんです。営業部ですから来る日も来る日も外交に行くわけですが、若い者に注文なんかくれませんよ。

――どういうところに行かれたんですか。

福島　やはり法人によく行きましたね。ただし、当時は法人で金を運用するなんてありませんよ。だからむづかしかったです。

――五年間の本店営業部時代は決して順風満帆ではなかったわけですか。

福島　それどころか、上司との「喧嘩の歴史」でしたよ。一番よくやったのは担当役員ですね。入社当初から聞いていたのは、「長期産業資本の調達をやって、企業が潤い、経済が活性化する」ということですが、ちょろちょろお金を集めてきて、株を売ったり買ったりしているのでは正に株屋じゃないか。「オレは株なんか絶対に売らん」と投資信託とか公社債を一生懸命売っていたわけです。その結果、お客様の預かり資産残高では本店営業部六十人中一番になったんですよ。ところが、上のほうからはもっと収益が挙げられるだろうと言われる。それでは私のやり方を評価してないということじゃないか、冗談じゃないよというんで、よく喧嘩したんですよ。

――営業部ナンバーワンとはすごいですね。

福島　一日に二、三十軒まわっていましたよ。飛び込みもやりました。そして帰るとお客様へのレター書きです。私も古風なところがあって、筆で巻紙に書いていました。そうするとお客様のほうでは年寄りが来ると思ったんですね、訪問すると「君は？」と驚かれました（笑）。

――「花のサラリーマン」なんてものではないですね。

福島　そうです。私はお蔭様で五年間で新規開拓では日本一になりました。たまたま運がよかったんでしょうね。大田淵さんがよく同伴外交してくれましたね。ところがこの人は無口な人で、お客のところへ行っても何も言わないんですよ。タバコに火をつけたらそのままくゆらしていて、最後に今日の〝核心〟というものをちょろちょろと言うわけです。さすがですよ。「こいつは口うるさい奴ですが、お客様に間違ったものは勧めない男ですから可愛がってやってください」てなことを言うだけですよ。

――それは大変重い言葉ですね。

福島　そうです。お客様も、えらい人が来てくれてそう言うんなら、まあ投資信託の百万円だけ買ってあげましょう、となるわけですよ。

――本店時代の思い出がほかにありますか。

福島　本店勤務時代は寮に入ったんですが、当時、寮のおばさんがまるで〝舎監〟なんです。仲間たちがマージャンをやると（私は全くやりませんが）、それをいちいち人事部へ通報するんです。私はけしからんと思い、人事担当常務のところへどなりこんだんです。寮生がマージャンをやっているからといって、いちいちチェックして注意するとはどうしてですか？今後寮は寮生管理にしますからと申し入れたわけです。

――積極的に行動されたわけですね。ところで、ずーっと本店

ですか。

福島　いや、金沢支店に転勤しました。本店時代の行動がマークされたのか、そこに五年間「幽閉」されましたよ。そこで、こうなったら北陸一円の大手の大半のお客様を開発して、全国一番の資産をつくって収益を挙げてやろうと一念発起しました。年は二十七歳くらいで結婚前でした。金沢は仕事でも遊びでもいいところですよ。

――やはり日本一になりましたか。

福島　投資信託とか社債の販売手数料と株の売買手数料を足して、総合手数料で、中部本部全体の一番になりました。

――ますますのご活躍ということですね。その後どちらへ。

福島　それから東京に戻って自由が丘支店に三年間勤務した後、最年少の支店長として松江支店に赴任しました。栄転だとおだてられましたが、当時の松江というのは〝金融共闘〟の一番強いところで、松江支店の連中もみんなカブれてしまってどうしようもないところでした。支店を閉めるかどうかというところで、支店長をやれということになったんです。先程お話した寮問題に対する行動からこういうことに強いと見られたのですかねー。

――特命ですね。

福島　そうです。人事担当に言われたことは、「君はものすごく仕事をするけどね、仕事をしなくていいから何とかおさめてほしい。全権委任する」というわけです。行ってみたらなるほど、仕事なんかする空気ではないんです。そこで、私は第一声で、

私はここへ仕事をしに来たんだから、君たちが仕事のために協力するというなら一緒にやろう、そうでないんだったらこの店はつぶす。オレは責任をとってやめる、と言ったんです。そしたらしばらくして、みんなから、一緒にやらしてくださいという声がおこり、そのうちみんなが喜んでついてきてくれました。

――それでは業績も盛り返しましたでしょうね。

福島　松江在任中の二年目、三年目で全国一番、二番になったわけですよ。そこで私は担当常務である本部長に、中国、四国で一番大きい広島支店を総収益で抜いたら広島支店長にしてくれるか、岡山を抜いたら岡山支店長にするか、と言ったら「それはするよ」と言ったんです。出来っこないと思っているから。ところが、三年目に抜いちゃったわけですよ。本部長から社長への直談判もあって、とうとう岡山支店長になったんです。その後本店へ戻り、株式部長をやって役員に、その後常務、専務を歴任し、専務一年で副社長に就任し、七年間、副社長をやったあと、現在の野村アセットマネージメントで社長、会長を歴任し定年になったわけです。

――「山一證券事件」の頃はどちらにおられたのですか。

福島　私が自由が丘支店にいた頃です。皆さんが山一から株券を引き出し野村に持ってくるんですよ。そこで私は営業マンに、必ず「山一からお越しになりましたか」と聞き、そうだと言ったら、「山一は倒産などしないから安心して預け続けなさい」と先ず言え、それでも預かってくれと言われるなら、お客様の意志だから仕様がないと。これは有名な話になりました。

――その後の山一の行き詰まりの事件の頃は？

福島　あの頃は私はＣＳＫの社長になっていて、山一の情報システムをやっている七百五十人の部隊の子会社をそっくり引き取ったわけです。そしてＣＳＫの子会社にして、君達に株を持たしてやるから最短距離で上場しようと励ましたところ、皆が頑張ってくれて、三年半で上場しましたよ。

――では、その方々は今主力部隊として働いているわけですか。

福島　そうです。現在ＣＳＫグループ一万人の中に溶け込んだわけです。そしてその山一の部隊が非常にいいコアになりました。

――野村證券時代を振り返ってみていかがですか。

福島　私は、金融改革というか、今のような総合金融サービスへもってゆくための野村證券の〝あるべき論〟については死に物狂いで取組んできたつもりです。で、それを業界レベルでやったのが、投信改革であり、現在の金融改革にそれをつなげたし、その後も郵貯の改革なども早くから主張し続けてきたのです。

政策にモノ申す

――今のお話に関連しますが、一昨年の「陵水フォーラム」の講義の中でもお話された〝郵政民営化〟がいよいよ決まりましたですね。

福島　うーんこれはね、私が野村證券の副社長時代から言っているんですよ。日本の資本市場を生かして、広く安定した長期産業資本を個人から調達して、企業の投資に使ってもらうというメカニズムを作らないと、日本の金融というのはよくならないわけです。長期産業資本として使える金というのは「長い足」の金でないといけない。ところがその金は何処へいっているかというと、結局郵貯、簡保なんです。日本の金融の輪の外で三百三十兆円という金が結局財投の金として大蔵省がみんなポケットへ入れてしまう。そこで、郵貯を民営化して、この金の流れをとめて本当にこちらへ廻し、金融のあるべき体制を作って日本の経済がよくなる手当てをすれば、景気もよくなっていくからというのは、私が小泉さんにかねがね言ってきたことなんです。結果、首相の強力なリーダーシップでようやく実現の

運びとなりました。

――もう一つの提言の「道州制」についてはいかがですか。

福島　私は「郵政民営化」の次は「道州制」の導入の問題だと思います。バブルがはじけて以降、地方自治体の大きいところでもつぶれそうなところが三分の一近くあるんですよ。それに対応するためには、「道州制」で八つか九つに統合して徹底した行革をやり、財政改革をやってそれで再建するしかないんじゃあないかと思います。この問題と郵貯の民営化とは裏表だと言っているんです。何もやらないで「死ぬ」のを待っていてはいかんでしょう。

――日本経済再生への話題として「ユビキタス」がカギだと言われていますが……。

福島　技術的にはそうです。というのは、これから日本を世界の中のあるいはアジアの中の日本としてみた場合、日本というのは独自に勝手には生きていけないんですよ。資源もないんですから。だから、どうしても世界中ときちっとしたコンソーシアムを組んで、生き抜く道を考えなくてはいけないわけですよ。今それの最大のポイントはどこかといえば、アジア、なかんずく中国でありインドなわけです。それと、その他世界中とどうやって手を組んでゆくかということです。日本がそれらの相手と同じことをやったら競争することになるじゃあないですか。今や日本はそれらの競争分野については、彼の国に全部譲るべきなんですよ。そして、そうでない分野、二十一世紀の成長分野へ日本はつぎ込んでいかなくてはならないんです。それが「ユビキタス」をベースにした新しいＩＴ社会の実現なんです。

――具体的にはどのように考えたらよろしいのですか。

福島　日本のＩＴはカジを切り替えて、ＡＶ機器なんかやめなさい、と私は主張しているんです。そしてユビキタスのところをやる。今やすべて半導体の時代ですが、その半導体を作っていてはダメです。それは台湾とか中国、韓国なんですよ。それを作る装備とか、それを応用して何かをするというのをやらないといけない。それはそれぞれの部門でも三十兆円とか五十兆円とかの単位の可能性をもっている産業になるんです。ユビキタス全部門では、将来数百兆円の売上が考えられると思います。

先輩も危機感を

――話題は変わりますが、大学へのご提言あるいは陵水会の在り方などにご意見がありましたらお願いいたします。

福島　法人化にあたって数年前に、大学が「リスク研究センター」の設置を考えているというので、資金集めに奔走しました。今後はカントリーリスク、特にアジアのカントリーリスクくらい、しっかりおさえておくことがあっていいのではないか、と思いサポートしたわけです。

――大変ご苦労があったのですね。

福島　金集めは大変でしたよ。諸先輩本当によく協力して下さいました。それから、これからの大学は、〝これなら企業が使ってくれる〟という人材を育てる、〝これなら企業がやりたい〟という成果を、大学と先輩が一緒になって生み出さないといけないと思いますよ。そうしないと、企業から金なんか得られませんよ。当時の大学側も、世界のトップクラスの大学と組んで、カントリーリスクはじめ激増する諸々のリスク管理に取組もうということで、やっと形が出来てきました。結果、中国の東北財経大学やシドニー大学と組んだり、ロンドン大学や米国のケロッグとの提携も視野に入っているようですが、なにか特徴のある、これだけは一番というものを早くやり上げないとダメだと思います。大学の現状や将来について、大学側もさることながら先輩達にも危機感が薄いですね。率直に言って大変ですよ。

――お忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。

わがウォーキングライフ

守谷　貞夫（大12回）

私は年間三千キロメートル歩いている。三百六十五日のうち土曜日を除いて毎日十一キロ歩くことにしている。日曜日は近くのゴルフクラブで過ごす事になっていて、腕の悪さもあり十一キロは歩く。

以上を概略集計すると、三百七十五日歩くことになる。従って三千キロ以上である。

平日は始業一時間半前に出社して、会社の周囲の海岸道路六キロを一時間かけて歩く。昼食時は十五分で食事を済ませ、五キロを五十分で歩くことにしている。完全に生活習慣となってしまった。

この生活は今年で十二年経過するので、丁度地球を一周（三十六千キロ）したことになる。

今から十三年前、突然医者から糖尿病だと宣告された。

血糖値（五五〇）、ＨＡＩＣ（十二）、重篤な状態だと言う。毎日ビール一本（大壜）、ウィスキー三日で一本、運動量一日四百歩という生活の結果である。インスリン注射が必要とのことであった。運動をすることも指示された。

当初、運動は通勤時会社から一キロ手前で車から降りて歩いてみた。革靴で一所懸命に歩いた。その結果の爽快感は今でも忘れられない。それ以来二キロ三キロと少しづつ手前から歩くこととしたが、とうとう自宅から直接徒歩で通勤する事になってしまった。距離は七キロ弱である。食事も抑えたこともあって、一年後には糖尿病は数値上は正常値に戻った。

医師は、六ヶ月目には驚き、そんな筈はないと強弁し、どうすればいいのか教えを乞う程であった。私は正常値まで戻すと宣言したが、医師はもしそんなことになれば逆立ちして歩くと言って可能性を否定した。私は

即座に、看護婦の逆立ちを所望した事は言うまでもない。

六ヵ月後には正常値としたが、まだ逆立ちは見ていない。それ以後病院とは無縁であり、健康診断結果も少々糖が高い以外、全て基準値内である。

ウォーキングをするには先ず靴を選ぶべきである。ウォーキングシューズとランニングシューズは基本的に全く違う商品である。ウォーキング用は土踏まず部分が分厚く、歩行にあわせて土踏まず部分を圧迫し、足先に滞留した血液を心臓にポンプアップする機能を有している。足裏は第二の心臓と云われる所以で、ランニング用はそうはなっていない。私はナイキの靴が一番いいと思っている。ただし一年もてば上々である。

歩く事が義務と考えると、永続きするものではない。先ず歩行による爽快感を徐々に実感できれば、自然的に歩きたくなる。

人間は本来歩くように生まれている。筋肉の三分の二は腰から下についていて、歩くことによりこれら筋肉が鍛えられエネルギーを消耗する、血行もよくなり血管も若返りする。人間も動物の一種であり野性動物の生活が一番理に適っている。

ライオンは食料を得るため草原を早足で歩きまわっている。餌を見定めると、全速度で走る、これが一番自然な生き方で身体によい。野生動物が高血圧や脳梗塞、胃腸病を患った話は聞いたことがない。ゆめゆめジョギングはすることなかれ。

ウォーキングは冬が一番楽しい。歩き始めは体が縮んでいるようでも、十分も思い切り歩けば汗が出てきて体中ホカホカしてくる。三十分もすると衣服の前をあけて、冷気を入れて体を冷やす時の快感はなんともいえぬものがある。

また歩行途上に目にする自然の移り変わりも大変心を楽しませてくれる。ああ梅が咲き出した、あの家の桜は今年は昨年よりもよく咲いた、あの家の百日紅は今年も見事に咲いた等々楽しみは尽きない。もうあの子が小学校か、あの少女が美しい女性になって、という様な楽しみもある。

また、楽しく歩くためには、歩いてゆく終着地までの道のりを考えてはならない。全ルートを考えてまだこれだけあると考えると精神的に疲れてしまう。先ず目先百メートルぐらいを目標に歩くとよい。人生だって先のことまで考えると、いずれ年老いて死に至る道であり色あせてしまう。

一人きりで歩くより、他の人が歩いている方がよい。一人きりだとどうしてもテンポが遅くなる。速足の人に負けまいとか、前を歩く人を追い抜くとか刺激があったほうがよい。一人歩きに比べて同じ道程でも十分も所要時間が変わることがある。特に同伴者がいると大変速くなる。人間は一人で生きると非効率になるということかもしれない。

ビジネスもコンペテイターが強い方が発展するものと思える。

私は難題に直面すると、歩行中に考えることにしている。夜間、布団のなかで考えることは後ろ向きでネガティブな結論になる。歩行中に考えた結論は結果的に大きな失敗は無かったといえる。

どうぞ皆様もどんどん歩いて爽やかに一生を終えようではありませんか。

ゴルフ談義

第六十三回東京陵水ゴルフ会
平成十七年六月六日(日)
金乃台カントリーC

幹事泣かせの天気と
ピンポイント予報

六月四日（日）杉並・中野で短時間集中豪雨による洪水騒ぎ、台風十四号の九州接近と幹事泣かせの天候の中、四日までに体調不良・急用などで四名の欠席届、五日（月）悪天候予報を理由に一グループ（五名）の不参加の連絡あり。

当初三十四名から九名減の二十五名の皆様は、集合時刻前には全員クラブに入り、雨具・傘の用意などをしていましたが、ピンポイント天気予報通り、スタート時刻に合わせるかのように雨もほとんど止み結局傘をさすこともなく、後半は薄日もさし気温も二十三～二十五度とこの時期にしては涼しく好コンディションの下で熱戦が繰り広げられた。

優勝の平居さんの五アンダーはじめ三位までアンダーパーと好スコア続出。特筆すべきは西澤先輩(本24)の四十四・四五＝八九と三アンダーの三位入賞。

パーティーもいつになく和やかな雰囲気に包まれ、途中、中川さん（富士貿易）提供のワイン争奪のあみだ籤による抽選会などもあり、全員が十七時の臨時バスで帰路につくという盛り上がりようでした。

新たに参加希望の方は、山本（〇四七―三三七―四七八〇）に電話下さい。案内をお送りします。

成績

優勝　平居　俊雄(大12)　66(19)
準優勝　中村　奎吾(大13)　67(18)
三位　西澤　正(本24)　68(21)
四位　松浦　幸作(大8)　71(23)
五位　三井　照次(大10)　71(10)
七位　西坂　徹雄(大9)　73(16)
十位　天木　清次(大8)　75(10)
十五位　吉原　悟一(大9)　77(19)
二十位　三宅　義男(大6)　82(19)
BB賞　浦谷　政夫(大7)　93(23)
二十五位　山本　保(大15)　93(23)
ベスグロ　三井81、**ニアピン**　平居2・松浦・三井・畠山・山田・木戸・山本、**大波**　木戸(11)、**水平**　中西

（山本　保　記）

第六十四回東京陵水ゴルフ会
平成十七年十二月八日(木)
金乃台カントリーC

穏やかな師走のゴルフ日和

このところ寒気厳しい数日でしたが、風もなく絶好のゴルフ日和に恵まれて、三十三名の参加者で一年の締めくくりを満喫。上位のアンダーパーに伍して、各賞に高商本科の歴暦が多数入賞され、陵水ゴルフの交流の真価と、元気印の手本が印象に強く感じられた一日でした。宴たけなわの高商校歌の合唱がひときわ高らかでした。

次回は陽春四月四日（火）です。多数の参加者を期待。

成績

優勝 黒澤日出男(大10) 67(21)
準優勝 名口 幸夫(大14) 68(7)
三位 松浦 幸作(本8) 69(23)
四位 簑島 安夫(大4) 71(19)
五位 富田 博司(大15) 71(10)
七位 中辻 喜蔵(本21) 73(36)
十位 川合 久嗣(大11) 73(18)
十五位 山口 昭夫(本22) 77(36)
二十位 楠田 迪彦(本24) 82(18)
二十五位 保正 保(本23) 83(24)
三十位 中村 奎吾(大13) 87(10)
BB賞 井口 博民(本21) 91(17)
ベスグロ 名口75 **ニアピン** 黒澤2、名口、簑島2、中村、竹内（大4） **大波** 黒澤 **水平** 井口 **参加者** 三十三名

（箸方海三 記）

東京陵水会囲碁会便り

東京陵水会囲碁大会開催

十一月十八日全国情報サービス厚生年金基金会館において、今年度第二回目の東京陵水会囲碁大会を、十九名の参加を得まして、開催いたしました。四回戦による成績をスイス方式の判定で決定し順位を競いました。

熱戦を繰り広げる中、下記の棋士が成績を収めました。

優勝 中沢竜彦 6段
準優勝 天田志郎 6段
三位 神埼栄次 6段

となりました。

くしくも、全員六段が実力発揮した結果となりました。

成績発表後懇親会に移り、熱戦の後を振り返りながら、悲喜こもごも楽しい雰囲気の中、解散となりました。

次回は六月を予定しています。多数の参加を期待しています。

「サークル二一座談会」

私達は一九八八年四月に経済学部に入学し、ゼミナール協議会で出会った仲間です。一九九五年九月に「サークル二一」という勉強会を結成し、半年に一度、彦根かその他の都市で開催しています。一〇周年を記念に座談会を行いました。その記録を掲載いたします。

開催日 二〇〇五年十月八日
開催場所・陵水会館にて。
出席者：島田衛（一九九三年卒・製造業）、法川伸二（一九九三年卒・公務員）、八田知之（一九九三年卒・自営業）、堀江慎一（一九九二年卒・研究機関）、森春樹（一九九二年卒・銀行）、山本周（一九九二年卒・福祉サービス）

(写真) 後列左から、塩谷、森、法川、坪内(現役)、武智(〃)
前列左から、山本、堀江、島田、八田の各氏

編集・インタビュー：塩谷昌史（一九九三年卒・大学）

――どうしてこのサークル二一を作ったか、その経緯をお聞かせください。

堀江 われわれが学生だったのは、一九九八年から一九九二年ないしは九三年なのですが。このメンバーのほぼ八割がですね、ゼミナール協議会という、各ゼミから委員が選出されて、そこで滋賀大学のゼミ全体の企画・運営を組織するという団体がありました。そこで、その一環として、たまたま一九九〇年に「関西ブロック大会」という、滋賀大と関西大学、立命館大学、龍谷大学等でゼミの大会を関西エリアで行いました。サークル二一のメンバーは、その時の運営委員を中核としています。

われわれは各ゼミから出てきているので、出身ゼミはそれぞれ違う。また、クラブも一部同じクラブに所属する人もいたけれども、文化系サークルの人もいたし、体育会系の人も新聞会の人もいた。卒業した後も、就職した業界が様々なんですね。せっかくこういう付き合いができたということで、在学中に時々集まっていました。その後卒業してしばらくも、年に一、二度彦根で皆さんと集まっていました。

私自身は在学中、吉田修先生という、ドイツ経営学の先生のゼミに在籍していました。卒業直前になって、三回生のゼミの雰囲気を知りたくなり、出席させてほしいと吉田先生にお願いしました。その時にゼミの雰囲気も違うし、メンバーも違うし、違った刺激を受けることができました。卒業したすぐの新入社員の年から、年に一、二度、吉田先生を訪ねて後輩のゼミに出席していました。

そういう事を二、三年ほど行っていた際に、山本さんと近況などを報告していた時に、私が彦根に行って現役の学生のゼミに参加していると話すと、「僕らだって、勉強したいと常々思っている」と。「銀行に勤めているから、日頃休んで彦根に行けないけれど、彦根に行ってみたいというニーズはある」と。そんな話の中で、旧ゼミ協メンバーの中でも勉強してみたいという希望はあったので、その人が今置かれているところで、何

を考えていて近況はどうなんだ、というところを簡単に資料をまとめて持ち寄れば、きっと、色々得るところがあるのではないか、ということで、一九九五年の九月に第一回をスタートさせました。

――それが十年ぐらい経つわけですけれど、遠方からも参加者があるというのは、何かメリットがあるのではないかと思います。それぞれ、これが勉強会の良いところだ、これがあるから、私は参加している、という意見があれば、皆さんから伺いたいのですが。

八田　僕なんかは、入社して結構しんどいというか、つらいこともあり、多少いじめられたこともあったりしたんだけど。皆多かれ少なかれ、しんどいことがあって、それは共通だと思うんです。この会では何の利害もなし、隠すこともないし、本音で聞ける。どういうことが起こっているかを皆から聞けるだけで、僕だけがしんどいんやない、皆も大変なんやと知るだけでも、すごく心強かった。それは入社して全く自信がないところで仕事をしている時に、勉強会で皆のレポート（A四・一枚）を読んでいると勇気づけられました。

法川　私が一番遠く、熊本県から来てるんですけど。卒業してしばらくは、二、三年は無我夢中で仕事をしたわけなんです。そうした中で、彦根に一度帰りたいなという気持、また皆と会いたいなという気持はあったんです。OB会の通知はあっても、OB会で会って酒を飲んで帰るのは、何かもったいないという気持があって。そういう時に、この会の催しの話が来ました。情報交換をして、ゆっくり酒を飲んで、泊まりでしゃべる。それぐらいの内容なら、来てもいいかなと思いまして。そういう充実した中身に魅かれて来ています。

山本　毎回来るたびに、レポートで皆の考え方とかが、割と若干軌道修正してるなり、新しい発見があったりとか、いろいろ皆が変わっていっている。それを読むのも楽しかったですね。もちろん、こうやって会って、この場で皆しゃべるのを聞いても、「ああ、このように思っているんだ」とか、「このような考えを持っているんだ」とか、色々その時々で、その都度変わっていくのがすごく刺激になりました。

堀江　やはり人間というのは好不調の波があり、仕事も私生活もすべてうまくいっている時もあれば、スランプに陥っている時もある。このメンバーの中でも、現時点で絶好調の人もいれば、ちょっと今冴えないなという人もいる。最終的な到達点から見れば、成長の過程かもしれないけれど、皆がそれぞれの思いとか、立場を背負って来て、ここでさらに元気とか勇気づけられて、次の半年とか一年を頑張ろう、ということが会の成功に繋がったのだろうと思います。

森　社会人になると結局勉強というのは、業務なら業務の勉強になってしまう。僕も銀行に勤めているので、いろいろ勉強させられるんですけども、自分の同僚と勉強について話すことはありません。要は、自分で考えていることを話す場がない。学生時代の時には友達もみな暇だったので話を聞いてくれた。でも社会人になると、もうそういう時間はなくて、せいぜい飲み会で楽しいことしか話さない。一応表面的には出さないけれど、みな実は勉強している。会社内ですと利害関係がありますから、要は、出世が早いか遅いかという話になります。そのような関係がない会ということで、このサークル二一は良いと思いますし、利害関係のないところの本音が社会人として話せる。

島田　私は創立当初からのメンバーではなくて、この会が五年くらい続いていたあたりで、この会のことを聞きつけて、こういうアカデミックな会があってやってるんだよ、と誘われて、意気込んで来たら、結構柔らかで楽しい雰囲気でした。それはベースが同じ大学で、皆あちこち散らばっているわけですが、年に一回や二年に一回に、顔合わしてひざ突き合わせて話すというのは、すごく新鮮に思えた。いろんな企画というんですか、それぞれ地場、地場で活躍されているところに行って、案内してもらうとさらに楽しい。開催地が東京だとか、地方ということもある。根本はね、いろんなやりとり・話が聞けて楽しめるというのがあるんですけど、観光などのプラスアルファがあるのが長く続いている秘訣だと思います。これからもますます発展させ続けていきたいと思います。

――十年である程度かたちも整ってきて、パターン化してるかもしれません。今後はこういう方向で会を変えていくとか、要望や提案があれば、お聞きしたいのですが。

堀江　ある程度かたちもできてきたので、無理のないかたちで続けていきたい。二回欠席したから知らないよ、というのではなくて、気軽に長く付き合っていけるようなかたちにしたい。二十代の半ば頃はしっかり勉強しようと、資料もしっかり作ってやっていたのですが。それぞれ皆、経験などの蓄積を積んできていますので、別に必ずしも資料にきっちりまとまってなくても、良いコミュニケーションや、良い情報交換はできると思います。一方で、これからはやはり観光的な要素も取り込みながら、楽しくやっていきたい。今回、東京陵水に御紹介いただけるようですが、私たちの活動に刺激を受けていただきたい。われわれの会に入ってくださいというのではなくて、このような類の集まりがいろいろなところで、和気藹々とできてくれれば嬉しい。

山本　俺、毎回レジュメを作るということが、すごく良いことだと思うんだよ。その人が書いてきたことを読み上げて、意見を聞いて、これを題材にいろい

ろ話が発展していく。それで十分、二十分ほど経過した段階で、次の人に引き継いで意見を聞いていく。これがすごく良いことだと思うんだよ。これをぜひ存続させたい。

堀江　A四・一枚のレポートだって極端な話、五分くらいワープロして子供の写真貼ってきても構わない（笑）。レジュメなんて五分か十分でできるんだから、これは参加の必須ですよ。

塩谷　この会は非常に面白い。やっぱり、このレポートを書いてくるというのが、話題提供の元になって、そこから話が色々ふくらむ。私も基本的には学校にいる人間ですから、そうそう周りのいろんな動きなどは分からないし、この会に出ていろいろ各地で様々な業種で起っていることを知ると、いろいろためになります。また、皆さんが異業種にいるというのも非常に良い点だと思う。これが皆、銀行員とか、公務員となると話が停滞するかもしれない。

森　異業種交流とかいって名刺を配るんだけど、配るだけで後、成果がないことが多いというのを雑誌で読んだことがある。

堀江　この会のメンバーは昔の仲間でもあるし、業種も違う。世の中では、人と人とを結びつけるのをビジネスにしている人もいる。カネを払って集まって、名刺はたまったけれど、何も残っていない。お金をかけずに、こんなに安上がりで非常にためになる。これが私たちの売りと思います。

八田　異業種交流で集まると、交流せないかんという目的が生まれるじゃないですか。ここには目的は何もないんですよ。（笑）自然発生的に集まっているわけで、ゼミが同じわけでも、クラブが同じわけでもない。たまたま偶然にゼミナール協議会で出会った人々が、やっている。偶然から始まっているからいいんですよ。だから、拘束されるものは全くない。ただレポート書かなければならないということぐらいでしょ。幹事をたまにやらないかん。それぐらいですよ。それが続いている原因でもあるし。いろんな企画はすごく良いと思うんですけど。最初は目的を持って集まったわけではないから、結構、気楽に和やかにやっていけてると思います。長く続いている理由はそれだと思う。

堀江　その都度、その都度、参加者は多少入れ替わりがあるにせよ、集まって何か得ようという意識がなければ来ないわけだから。その時にものすごく今回はためになった、あるいは収穫がなかったという人もいるかもしれないけれど、それぞれの人がそれぞれの思いを抱いて集まって、地元に戻り、そこから先にがんばろう、一所懸命仕事しようと思う。そこが一番の良さなのかもしれない。

塩谷　A四・一枚の近況報告を書くことで、自己反省できるというのが良い。毎月毎月だったら嫌だけれども。半年に一回くらい、過去を振り返って書いて見る。この半年自分がどういうように生活してきたか。これからどうしようか。この振り返るというのが非常に良いと思いますね。

八田　よう考えて見たら、ブログの先駆けやな。あれかて、近況報告みたいなもんやろ。われわれは十年前からやっている。

山本　この基本的なスタイルを変えないほうが、いいんじゃないですか。

――この基本スタイルを維持して、その都度いろんな要素を組み合わせながら、今後も続けていくということですね。ありがとうございました。

彦根コンフィデンシャル

――滋大陵水新聞会

近年の就職状況について

今年（十七年）三月に卒業した学生の場合は、民間企業の内定率は、九十六・四％で、前年を五ポイントほど上回った。かなりの伸び率であるが、現四回生（十八年三月卒業予定）の実績はそれを上回るのではないかというペースとのことである。まだ確定的な数字が出せる状態ではないが、十七年六月の時点での内定率は七十パーセントと、前年同時期に比べて二ポイントほど高くかなり良いといえる。「内定率だけではなく、内容が良い」というのは就職指導担当の能勢助教授の弁で、今年度はトヨタが一人、電通が二人を皮切りに、ＡＮＡの客室乗務員やアサヒビールなどといった、いわゆる有名企業への内定が目立つ。トヨタは十年ほど、電通に関しては二十年ほど本学からの内定実績がなかったそうで、今まで入れなかったところに入れる人が出てきているという意味で、かなり善戦しているといえる。例年実績を残している銀行への内定も今年は更に多いという。学生の就職活動に対するモチベーションも高く、三回生から就職相談室を訪れる人が以前より増えている。秋になり決まらないという学生が頻繁に訪れるのが常だが、それも減っている印象とのことである。

公務員の内定率は民間企業に比べて悪くなっている。昨年度の内定率は四十七・二パーセントで、一昨年のおよそ六十二パーセントという数字から十ポイント以上の減少である。公務員削減政策の一環として国家公務員Ⅱ種の採用数が減り、それに影響を受けた公務員志望の学生が国税専門官の志望に流れる。それによって国税専門官の合格点の水準が上がり、例年なら受かっていたレベルの学生が通らなかったということの原因の一つであるらしい。そのほかにも市町村合併などに端を発した地方公務員の採用減もあり、公務員志望者には厳しい状況が続いている。今後もこの傾向は暫く続くようで、その流れを受けて

なのか今年度の公務員志望者が減少している。

最近の採用の傾向として、本学のデータではここ二年の間では女性の内定率が男性を上回り、企業が女性を戦力として活用する社会が確立してきたといえよう。

能勢助教授の目から見て、しっかりと努力すればどんな企業にでも入ることができる、というのが現在の滋賀大生の印象であるという。目標の企業に向かって努力すれば、それがどんなところであっても内定をもらえるレベルにあるとのことだ。しかし努力を怠っていたにも拘わらず入れてしまい、そこで自己分析が不十分のまま、内定したからとあっさり就職活動を終えてしまって、就職先に入社してから後悔するという事態も起こり得る。諦める必要のないレベルにいるのだから、できるだけ安易に妥協せずに挑戦していってほしいと能勢助教授は語る。

就職活動に対する大学側のバックアップも充実している。十月中旬（本稿執筆時）には、これから就職活動をまさに始めようとする三回生を対象として「就職基礎講座」が行なわれている。これは活動を始めようにも何からすればいいかわからない、という声が多かったことを受けて三年前から始められたもので、準備段階でやるべきこと（自己分析・業界研究など）の解説を行なっている。三回生を一斉に集めるガイダンスではなく、小教室で同一の講座を複数回開催する方法を採っており、授業時間との兼ね合いも図れる。これを始めとして、業界セミナーや面接に関する講座なども予定されており、モチベーションをあげてゆくには最適な支援体制が築かれている。就職活動の時期が早まっていると叫ばれている昨今であるが、本学においては対応がなされているといえるだろう。

今年度のＳＦＡ（学生・教職員間の話し合いの場）において、学生から「ゼミを前倒しにしたほうが良いのではないか」といった案が出された。私立大学では実際にゼミを三回生で終らせているところもあり、就職活動の早期化で四回生前半のゼミがほとんど機能していない現状を懸念しての訴えであったが、学校側の回答は「現時点ではその必要がない」というものであった。教授会で以前出たことのある議題であったということで、学校側も熟慮した結果の回答であったと思われる。今後、さらに就職活動の早期化が進むのなら、ゼミの前倒しという事態も免れないものとなるだろう。学生の就職活動に対する強い関心の例として述べたい。

民間への就職状況はいい傾向が続き、公務員は相変らず厳しいというのが現在の傾向である。これらは社会の動きによって生じた一般的な傾向であるともいえ、本学にのみ当てはまることではないかもしれない。しかし滋賀大生をほしいという企業は多いという見解だそうで、今年度の実績もかなりのものを残せている。今年度の結果がまだ出たわけではないが、今のモチベーションが維持されれば、来年度以降も結果が残せるのではないか。

来年度は筆者の番である。自己分析に業界研究、自分自答の日々が始まる。素晴らしいバックアップがあっても、心強いＯＢ陣がいても、結局は自分の力次第。能勢助教授の丁寧なお話に刺激を受け、同時に大丈夫なのかと焦りながら本稿を締めくくる。

（滋賀大学陵水新聞会・吉岡　徹）

東京支部　平成十七年度年会費納入者追加一覧

（平成十七年六月一日～十月三十一日納入分）

松居敏郎（本11）、若林定男（本18）、山口輝朗（本20）、井口博民（本21）、樋口廣太郎（本23）、関本晃三（本22）、高木早苗（本24）、落合忠一（別11）、西脇宏三郎（別12）、外江龍太郎（工2）、小池英夫（大1）、白木昭雄　渡辺陽彦（大2）、田中　博　清水善和　中川弥次　畑　宗明　矢野　昭（大3）、新道隆弥　谷　文夫　辻　昇平　松岡正曜（大4）、青島　弘　中川郁三　平野　広（大5）、大谷毅丈夫　玉井義臣　橋本長夫　高橋秀治　林謙治郎（大6）、市川浩久　東野和弘（大7）、池田弘孝　西村　信　林史欣　安田一雄　寺田耕三（大8）、小野　浩　中川和己　中島勝司（大9）、小西捷治　三井照次　山田　進（大10）、関恵文　橋本聡二（大11）、中村圭吾（大13）、北村　徹　中村弘　石田昭郎（大14）、鈴木勝　柘野茂樹　神谷　端（大15）、浜口栄治（大16）、川崎憲夫　前田　豊（大17）、市岡隆治　岡本文夫　影山哲也　田中和夫　松本　剛　村瀬尚文　徳山秀雄（大18）、西沢弘行　竹森二郎　戸田保延　宮川　誠（大19）、角田健一　坂井真修　松山　仁（大20）、北野敏彦　能島伸夫（大22）、玉置辰司　中村勝己　深谷靖純（大23）、徳山　均　仙田修三　斉藤裕士（大24）、小谷恭一　安井喜重（大25）、近森彦義（大26）、中野達也（大29）、磯野和也　吉田繁喜　武田吉史（大30）、酒井康就（大32）、郡山泰和　大石修巳（大34）、大塚正人　吉村栄祐（大37）、北川昌樹　岸野正史（大38）、原　弘（大39）、立木賢一（大40）、菅真理子（大46）、蔭山二郎　松江大輔（大53）。

以上には数年分一括納入者を含む。

寄付金提供者

高橋規久治（本5）、沼尻恒雄（本14）、早藤　恭（本18）、亀井潤吉（大2）、玉井義臣（大6）、堀内和　堀川幸夫（大12）、豊田徳司（大17）、竹森二郎（大19）、加藤義治（大28）、筒井泰三（大29）

合計三万八千円

謹賀新年

MTE 守谷エレベーター

守谷輸送機工業株式会社

代表取締役社長　守谷　貞夫（大12回卒）・田村　寿夫（大12回卒）

本社・第一工場　〒236-0004 横浜市金沢区福浦1－14－9　TEL（045）785-3111㈹　FAX（045）780-1881
営業本部　〒220-0004 横浜市西区北幸2-9-40 銀洋ビル4階　TEL（045）322-3111㈹　FAX（045）322-9486
東京支店　〒104-0032 東京都中央区八丁堀1-6-1 協栄ビル7階　TEL（03）5542-2700㈹　FAX（03）3297-7400

第18回 大近江展

会期：平成18年2月23日(水)～28日(月)
10時～20時（最終日は18時まで）
会場：日本橋高島屋8階催事場

【主催】㈳びわこビジターズビューロー【後援】滋賀県【協賛】㈳東京滋賀県人会・全国滋賀県人会連合会

Kinnodai 株式会社　金乃台カントリークラブ

代表取締役社長　大塚　英一

〒300-1211　茨城県牛久市柏田町3432
TEL 029-872-0182　FAX 029-872-3182
『今年も皆様のご来場をお待ちしております』

編集所感室

○平成五年を象徴する事柄は、夏の総選挙でした。郵政民営化を具体的な争点に掲げ、「改革」を旗印に戦った、自民党が稀有の勝利を収めました。選挙民は改革に期待したのです。法人化成った母校の改革がどのように推進されてゆくのか。改革の力の所在をしっかりと確認し、できる事から支援体制を布いて行こうと陵水会は意を固めています。

○彦根市ほど我々がお世話になった自治体はないわけで、このたび母校と同市とが協力協定を結びました。東西の大学の歴史をみても、地元への密着度が大学の発展に重要だったと言えます。法人化の下で市も大学もどのように協力体制を構築してゆくでしょうか。

○支部規則の改定が平成十七年度の総会で承認されましたが、改訂までの検討の道筋が徹底されていないとの監事からの指摘を受け、高木監事から、経過の説明をして戴きました。現実の動きに即して改訂、支部活動が推進されやすいものになりました。（H）

陵水会東京支部
ホームページアドレス
http://www2.ocn.ne.jp/~ryousuit/

「会報」原稿・情報ご送付先

林　史欣（大8回）
〒164-0014
中野区南台二―一五―一〇
（TEL・FAXとも）
〇三―三三八一―四四三一
※編集室のメールアドレスは
chikayoshiybb@yahoo.co.jp
（次号分〆切日五月末日）

発行所
〒236-0004
横浜市金沢区福浦1―14―9
守谷輸送機工業㈱内
陵水会東京支部　支部長　宇治原嘉政
電話045（785）3716

印刷所
〒110-0015
東京都台東区東上野1―28―3
船舶印刷㈱
電話03（3831）4181